

紀元前百年頃、インドで大乗仏教が興りました。大乗仏教は、人々のことを考え、助けることを重視しました。常に人々のことを考え、助けることを誓い実践する「菩薩」を理想の人格としました。

大乗仏教が成立するにしたがって、さまざまなお経がつけられました。『法華経』や『維摩経』などがあげられますが、その一つとしてつけられたのが、『般若経』です。紀元前百年頃、つまり大乗仏教の誕生と同時期にその原型ができました。

『般若経』はやがて、さまざまな解説などをつけ加えていくなどして『大般若経』六百巻といった長いものになっていきます。紀元二百年頃まで拡大していった『般若経』は、紀元三百年頃を境に、凝縮される傾向に変わり、その過程で誕生したのが、『般若心経』なのです。

『般若心経』の「心」には、真髓という意味があります。とても長いお経を、三百字足らずの短いお経の中に凝縮したわけですから、大乗仏教の智慧の真髓が書かれているのです。

『般若心経』のテーマは「空」です。

「空」とは、いかなる存在も独立したものではありえず、すべての存在とつながりあっているという教えです。自分という存在も、自分以外のすべてのものがなければ、存在することができないのです。

私たち一人一人が、永遠に変わることのない存在ではなく、常に変わり続ける存在であることを、「空」は私たちに教えるのです。

『般若心経』には、観自在菩薩が出てきます。これは観音さまの別名なのですが、観自在菩薩が「空」をさとり、お釈迦さまの弟子で「智慧第一」と言われた舍利弗尊者に、「空」の教えを説くという構造になっています。それまでの教団で尊敬されていた舍利弗尊者に、観自在菩薩が教えを説くというところに、それまでの教団のあり方を乗り越えようとした大乗仏教らしさが見えます。

観音さま、つまり観自在菩薩は、さまざまな姿に身を変えて多くの人々を救う菩薩です。「空」をさとり、とらわれなき心をもって、人々を救う観音さまは、大乗仏教の理想的な人格を表しているといえます。

ぜひ、『般若心経』に目を通してみてください。そしてできれば、声に出して唱えてみてください。大乗仏教の深い教えに触れることができるでしょう。